

平成21年度

第2回 気候変動による世界の水資源量変化及び社会的影響検討委員会

- ・ 日時：平成22年1月20日（水）13：00～15：00
- ・ 場所：（財）国土技術研究センター 7階・第3会議室
- ・

【 議題について 】

(1) 第1回検討委員会での指摘事項について

- ・ ご意見、ご質問等は、なし

(2) 気候変動による世界の水資源量変化予測モデルについて

- ・ さらなる施策の実施における節水率の効果の反映は、技術的な節水率の向上の他に水道料金の価格の設定による節水効果を含むとよい。
- ・ 各民間企業や製造業は、回収率を上げることで水を無駄なく使っているが、回収率を上げるためにはエネルギーを使用してCO₂を排出する事となる。CO₂削減や環境負荷低減が望まれる現在において、回収率を無理して上げることが本当によいことなのか、将来の宿題として検討すること。
- ・ 施肥量については、ヘクタール当たり7トンで2050年に7トンになるようにしているのか、2050年まで7トン固定で推移するのか？
 - 施肥量とGDPの相関関係から、その時のGDPに応じた施肥量を与えるようにしています。ただし、GDPが増加しても7トンを上限值にしています。（事務局）
- ・ 水が不足した場合、水資源賦存量を増やすような、フィードバックをかけるメカニズムがこのモデルには反映できているのか？
 - 農業については、穀物市場モデルを導入しているので、穀物価格の高騰により次年度の作付面積を増大するものとなっていますが、生活用水については、フィードバックの対応をしていません。（事務局）

(3) 相関関係について

- ・ ご意見、ご質問等は、なし

(4) 基本型の計算結果について

- ・ 1990年の主要4品目穀物生産量は、低く算出されており、実績値と大きく乖離している。現在の生産量は、米約6億トン、小麦約6～7億トン、大豆約2億トン、コーン約7億トン程度である。

→ 1990年の初期値は、今回モデルでは推定値（計算値）であるので、既存データも含めてプログラムをチェックします。また、1990年と2005年については、既存データと計算値を比較して精査します。（事務局）

(5) 予測結果の評価方法について

- ・ 評価方法として、貧困人口を指標としているが、将来の摂取カロリーが増加すると貧困人口が増加することになっている。この考え方の場合、その国の穀物量（消費量）が増加した場合、貧富の格差が拡大することとなり、穀物量が減った方が格差という面では良い国にならないか。この貧困人口の考え方は、どのような世界観を持ち、どのようなアウトプットを示すかが重要である。
- ・ 貧困人口を指標として、結果をどう見るかというのは、哲学的で良いと思う。こういうシナリオでこういう考え方で計算した場合、将来はこうなる、ということでも良いと思う。

(6) その他

- ・ 第3回検討委員会開催日時
◇ 平成22年3月2日（火）10:00～12:00 JICE 会議室

—以上—